

目次

口 絵
凡 例

第一章 奈良町の成立

第一節 近世奈良の夜明け

松永久秀と多聞城

多聞城の造営

織田信長と奈良

信長の奈良制圧

豊臣政権の奈良支配

秀吉と筒井氏

第二節 奈良町の形成とその支配

江戸幕府の成立と奈良

徳川家康の奈良支配

奈良町の成立

大坂陣と奈良

松永久秀の奈良支配

大仏殿の炎上

久秀の没落

奈良とキリシタン

多聞城の破却

指出

奈良惣町

豊臣氏の寺社政策

豊臣政権と町民

太閤検地と奈良

37

37

19

12

1

1

奈良奉行

奈良奉行の設置

奉行所機構の確立

与力と同心・郷同心

奈良代官

奈良町の行政

寛永の地子免除

惣年寄

町代とその改役

町触れと高札場

被差別部落の支配

被差別部落の成立

奈良町の被差別部落

被差別部落の生業

第三節 寺社領と大名領

寺社の支配

寺社の朱印地

寺院支配の仕組み

神社の支配

大名領の村々

柳生藩の成立と領内支配

古市奉行所と藤堂藩領の村々

郡山藩の農村支配

その他の

領主の村々

第二章 奈良町の産業

第一節 産業の町

奈良晒と奈良町

南都の名産

南都の土産

産業の町から観光の町へ

第二節 奈良晒

麻の最上奈良晒 奈良晒の成立 奈良晒の発展 流通過程 生産形態 晒屋の経営形態
奈良晒の衰退

第三節 酒 造

僧坊酒と諸白づくり 南都諸白 霰酒 幕府の酒造政策と奈良 奈良酒の衰勢と江戸酒屋
元禄期の奈良酒造業 酒造業の停滞 幕末の酒造業

第四節 製 墨

油煙墨 製墨業の展開 墨屋と官名 松井元泰と古梅園 奈良墨の発展 墨職組合
幕末の奈良墨

第五節 名産拾遺

名産の史料 奈良刀 具足 奈良団扇 豊心丹 法論味噌 奈良漬 鰻頭
火打焼など

第三章 奈良町の盛衰

第一節 東大寺復興と奈良の賑わい

大仏の修理

大仏修造の計画 公慶上人の発願 奈良町民の協力 開眼供養 町の人出

大仏殿の造営

再建の準備と勸化 幕府の援助と工事の進展 落慶法要

173

第二節 奈良町のすがた

奈良の町

町の数 戸数と人口 町の大きさ 町のなまえ 町と町家 木戸と会所

187

町のしぎたり

町掟 町掛り 冠婚葬祭 町火消し

202

第三節 町民のくらし

町家と職業

町家のすがた 大家と店子 家職取調帳 さまざまな生業

215

まちの歳時記

年中行事 町民の一年 おん祭とお水取り 鹿の角伐り 鹿の保護と町民

228

生活の諸相

町の芸能 芝居屋敷 芝居の興行 犯科と仕置

243

町民の信仰生活

祭礼と氏子 春日講 檀家の宗派 仏教信仰と講

254

第四節 生活の動揺

おかげまいりと奈良

伊勢講と伊勢踊り

宝永のおかげまいり

明和のおかげまいり

文政のおかけおどり

お蔭灯籠

うちつづく災害

風水害・干ばつと地震

奈良の火事

飢饉と打ちこわし

享保の飢饉

天明の飢饉

天明の打ちこわし

天保の飢饉

奉行所の対策

被差別部落の動き

部落人口の増加

生活向上への努力

施米の要求

解放への胎動

第四章 奈良の近世文化

第一節 近世初頭の奈良文化

性格と特色

寺社とその文化

寺社の復興と整備

移建・創建の寺院

寺院の学問

美術と芸能

多彩な文化の展開

270

285

291

302

313

318

333

御伽草子と禅文学 和歌の伝授 奈良の連歌と紹巴 金春座と能楽 茶会の隆盛と茶
道具 宝蔵院流と新陰流

第二節 近世文化の諸相

寺社の盛衰

東大寺・手向山八幡宮・正倉院 唐招提寺の復興 興福寺の炎上と修復 西大寺・
元興寺・大安寺 その他の寺院

教養と文学

奈良と上方 学問の動向 史料の採訪 文学の題材 俳諧の隆盛 狂歌の流行
漢詩と戯曲 奈良暦

美術工芸

奈良の美術 奈良人形のおこり 岡野家と森川社園 赤膚焼の再興 青木木鬼と奥田
木白

第三節 名所としての奈良

奈良の名所

寺社参詣の旅から遊覧の旅へ 南都八景 名所の数々 奈良と文人の旅 旅の道筋と
旅籠屋・土産物 植桜楓之碑

名所記類の刊行

初期の名所記 奈良町の地誌と図会 案内記・地図の刊行

第五章 幕末の奈良

第一節 幕末の奈良町

幕末の町政

天保改革と奈良

開国の影響

梶野良材と明教館

川路聖謨の施政

441

町民生活の諸相

旅籠屋の争論

町民と産物会所

町の娯楽

かさむ出費

嘉永の大地震

物価の高騰

454

農村の動揺

負担の増大

水路の開削と水争い

干ばつと出水

角南領の一揆

467

第二節 近世奈良の閉幕

幕末の思想と学問

尊王攘夷論と奈良

陵墓の調査と修築

北浦定政と平城宮跡

伴林光平と奈良の人々

479

大政奉還

天誅組の余波

ええじゃないか

近世奈良の閉幕

494

付表

あとがき

執筆分担一覧

凡 例

- 一 本巻には安土桃山時代と江戸時代を収めた。
- 一 日本年号には、その下の（ ）内に西暦を付記した。
- 一 表には一連番号を付した。数ページにわたるものは巻末に付表としてまとめた。
- 一 本文の叙述は原則として常用漢字と現代かなづかいによった。固有名詞や歴史的用語はこの限りでない。
- 一 引用史料については、読み下し文に改めたものもある。